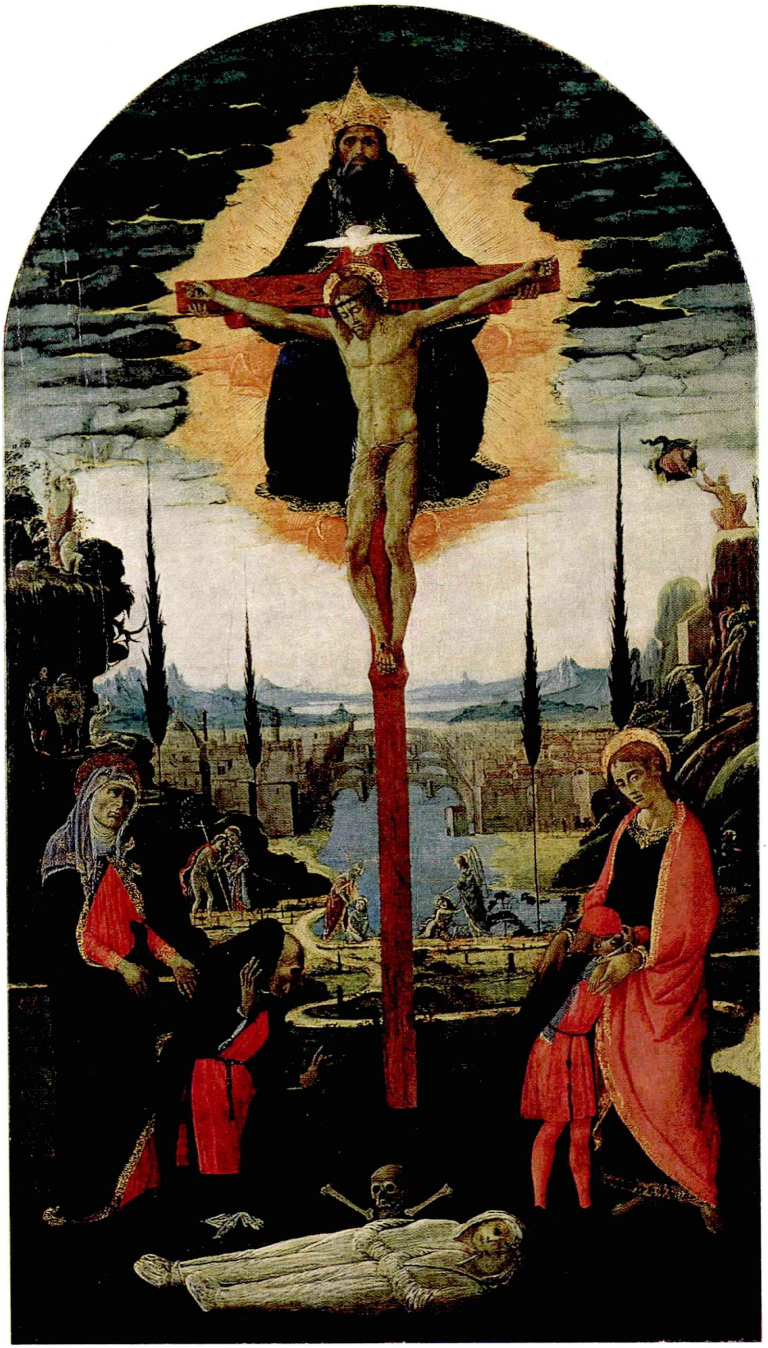

新収作品：セライオ《奉納祭壇画》

昭和48年度の新収作品について

山田智三郎

Nouvelles acquisitions,

par Chisaburoh F. YAMADA

国立西洋美術館は，昭和48年度に，ヤコポ・デル・セライオ(1442—93)の奉納祭壇画一点，マニャスコ(1667—1749)の油絵一点，15世紀のクレタ派の画家リッツォス作のビザンチンのイコン一点，合計三点の絵画を購入し，彫刻としてはブールデルの《絶望の手》のブロンズ一点，さらにヴュイヤールの有名な版画シリーズの中でも傑作とされる《料理する女》一点を購入した。これらの作品についての詳しいデータは新収作品目録に記してあるので，ここでは購入作品中最も重要な絵画三点について少し詳しく報告することにしたい。

三点のうち最も古い時代のものであるイコンは，もと松方コレクションのもので，日本のある私有コレクションのものになっていたが，本館の越宏一氏の調査により，15世紀のクレタ派の代表的な画家であるアンドレアス・リッツォスの主要作品の一つと見なすべきものであることが分ったので購入したものである。この作品についての越氏の精密な研究は，昭和49年3月に発行された本年報7号に掲載されている故，それを参照されたい。

セライオの奉納祭壇画（原色版）は，上半に描かれた三位一体図の十字架を下に長く延ばして，下半がゴルゴタ丘上のキリスト磔刑図となっている珍しい構図のものである。この十字架の左右には聖母マリアと使徒ヨハネが描かれ，十字架の下，前方には少女とその母らしい女性の屍体が描かれている。それに向って跪き，二人の死を悲しみなげく夫に，聖母が背後からいたわりの手を差しのべている。向って右の聖ヨハネは，母の死に泣きくずれる男の子をかかえ，慰めている。亡くなった妻と娘の冥福を祈るために奉納した祭壇画なのである。1479年と1484年にはフィレンツェでペストが流行して多数の人が死んだ。この母娘は，恐らくこのいずれかの年のペストの犠牲者であろう。

背景には，アルノ河を中央に，当時のフィレンツェ市の実景が描かれている。河にかかる四つの橋の描写は，後述するハイデンライヒ教授の論文によると，1480年の実景図と比べることによって，実景そのままに描かれたものであることが分る。河の向って左手にはパラッツォ・ヴェッキオの高塔や大聖堂のドームが見える。町の背後の遠景はしかし画家の想像図で，ここにはレオナルドの初期の仕事（《キリストの洗礼》の遠景と，ウフィツィ美術館の《聖告》の遠景など）の影響が見られる。町をはさんで左右に山の傾斜が描かれており，山上から河岸にかけて，八つの情景が描かれている。左側には，アブラハムがイサクを生贄にしようとするところ，サマリア人の慈善，キリストと洗礼のヨハネ，聖アウグスチヌスの幻影，右側には，十戒を受けるモーゼ，聖ヒエロニムス，聖フランチェスコ，トビアスと護りの天使を描いている。こうした小情景を数多く背景に描きこむのは，セライオが特に好むところであった。

ヴァザーリによれば，セライオはフラ・フィリッポ・リッピの弟子で，二つ年下のボッティチェルリは彼の相弟子であった。後期にはボッティチェルリから強く影響を受けた。彼はしっかりした技術の所有者ではあったが，創造的才能に恵まれず，個性の弱い二流画家

で，ボッティチェルリのみならず，ギルランダイオその他当時の一流画家の様式をいろいろと採り入れて描いている。そのため，彼の絵は名品ではないが，初期ルネッサンス芸術の主流であったフィレンツェ派の15世紀後半の様式を示すには格好の見本である。

このたび購入した祭壇画は，ハイデンライヒ教授のこの絵についての詳細な研究によれば，ボッティチェルリの影響がいまだ強く現れぬ中期の作品である。同教授は様式についての考究と，ペスト流行の年とあわせ考えて，1480年代はじめの仕事としておられる。この絵の主調は先生のフィリッポ・リッピの様式であるが，キリストにはマサッチオから習ったところも見られ，遠景にはレオナルドの，人物にはカスターニョの影響さえ認められる。

本館にはイタリア・ルネッサンスの宗教芸術を示す見本が今迄一点もなかった。数年前入手したバルナ・ダ・シエナの《聖ミカエルと竜》は，中世末期の宗教芸術の例で，ルネッサンスのものではない。また旧松方コレクションのカルロ・クリヴェルリの《ある僧正の像》は，大きな祭壇画の両側を飾った四枚の翼の一つにすぎず，宗教画の例とするべきものでないし，修復がひどくて，原画の美をとどめていない。セライオは，大家の輩出した初期ルネッサンスの画家としては二流画家ではあるが，彼の主要作品の一つであるこの祭壇画は，初期ルネッサンスの，それも主流であるフィレンツェ派の宗教芸術の好例として見て頂くに充分の美しさをもっている。この絵は今のところ，初期イタリア・ルネッサンスの宗教芸術を示す日本における唯一の作例である。

アレッサンドロ・マニャスコの《嵐の海の風景》は，同じ作家の《羊飼のいる風景》と一対をなしているものであるが，一対をまとめて購入するだけの予算額が認められなかったので，他処へ売られて了うのを防ぐため，取敢えずこの絵一枚だけ今年度購入したもので，昭和49年度に他の一枚を購入する予定である。

この一対は，マニャスコ研究の権威，デログが，マニャスコの第二ミラノ時代の最盛期である1718—25年の作としている壮大な風景画である。彼独特の強い筆致で激しい嵐のなかの海岸風景を描き出した今年度の購入作品は，壮大な自然の美と威力を表わすと同時に，大自然の前には小さな無力な存在でしかない人間の自然との果敢な戦いの姿をも示している。

マニャスコはイタリア後期バロックの特異な風景画および風俗画の作家で，その表現主義とも言える，激しい動きを示すドラマチックな表現の故に，戦後とみに評価の高まっている画家である。ティントレットの後期の作品から影響を受けた（グレコの影響を論ずる人もいる），力強く大まかな筆使いとハイライトの強い画法で，暗い室内あるいは風景のなかに，多くの，激しい身振りをする小さな人物を描き出す彼の後期の怪奇な絵は，人間存在の不安を感じさせて，現代特に高く評価されている。しかし，私は一般の趣味を考えて，後期の作品よりは明るい，しかし，人間を打ちのめすような壮大な自然の偉力を表現した壮年期の絵を選んだ次第である。